

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

巻頭言

総合科学研究所所長 洪谷 寿
SHIBUYA Hisashi

6月4日の朝日新聞に、文部科学省の有識者会議の取りまとめにおいて、小学校のプログラミング教育が2020年には必修化されるという記事が掲載されました。それによると、目的はプログラミング言語を教えるのではなく、コンピューターを介して意図を実現する手順を論理的に考える力を育むこととしています。プログラミング教育は、「どんな職業に就くとしても時代を超えて普遍的に求められる」とし、ICT環境の整備や指導体制の確保が不可欠だと次の学習指導要領の総則に明記されるそうです。新教科は作らないとのことですが、総合的な学習の時間などで、小学校でここまで教えることになるのかと思うと少々驚きます。

このような考え方の背景には、今の日本を取り巻く状況の大きな変化があります。文部科学省の「中央教育審議会答申と今後の教員養成施策の展開」という資料には、世界のGDPにおける日本の国際的な存在感の低下、少子高齢化による総人口の減少と高齢者人口比率の増加、生産年齢人口の減少等の社会的な不安状況が挙げられています。また、ゆとりから学力重視路線へ変更した子供達の状況としては、PISA等の調査によると再度日本の子供達の学力はトップレベルを回復したものの、学習への動機付けや実社会との関係、自己肯定感の低さが目立っています。また、子供の貧困率の増加、不登校児童の増加、暴力行為の増加、日本語指導の必要な外国人児

童の増加、通級・特別支援を必要とする児童の増加、生活保護を必要とする児童の増加等の大きな問題を抱えています。

そして、以上のような様々な問題に対処する教育的施策として、平成31年には教員養成を行う大学において、大きな教育改革による新教職課程が実施される予定です。新たな課題として、英語・道徳・ICT・特別支援教育やアクティブラーニングの視点からの授業改革、教職に関する実態を体験する学校インターンシップの導入、教職課程に係る質保証・向上、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の統合などが挙げられています。このように今まで以上に、質の高い教員養成を目指して教職の意味が重視されるため、大学教員である私たちも身を引き締めて大学生を教育していかなければならないと感じています。

そして、今の大学生が優秀な教師に育つことにより、彼女らが教える子供達が明るい未来を創造的に生み出していくことになるのだと思います。

総合科学研究所では、本だよりでもご紹介していますように機関研究としての、創立者越原春子・女子教育、大学の授業法、幼児の才能開発、地域貢献事業としての子供たち向けのワークショップなど、またプロジェクト研究においても科学的な視点での実践的な研究を推進しています。

9月23日(金)には大学講演会を開催します。中央教育審議会委員の無藤隆先生のご講演を予定しており、新教職課程についてのポイント等をお聞かせいただけると期待しています。

総合科学研究所の企画にご賛同いただきご協力いただきますようお願いいたします。

平成27年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健所「若がえり教室 きらきらコース」を終えて

名古屋市瑞穂保健所 保健師 相澤美奈子

瑞穂保健所では、平成27年度に名古屋女子大学と共催で「若返り教室(きらきらコース)」を開催しました。この教室は、高齢者の認知症・うつ病を予防するための教室として平成21年度より開催しており、名古屋女子大学の教員や春光会の会員の方に講師として協力いただいています。毎年多くの参加者があり、大変好評をいただいております。

平成27年度は、平成27年9月から平成28年2月までの6日間コースで、60歳代から80歳代の35名の方が参加されました。内容は講話を聞くだけでなく、作品制作や音楽療法、調理実習などのアクティビティを多く取り入れたものとなっています。具体的には、アイロンプリントを使ったオリジナルTシャツ作成、ヒノキを使った玩具作り、懐かしい童謡の歌唱、ハイジの白パン作りなど、わくわくと気持ちが「若返る」ものばかりでした。名古屋女子大学の学生の協力もあり若い学生との交流を楽しんだり、学食を利用されたり、参加者の皆さんは期間限定のキャンパスライフを満喫されていました。「教室に参加して積極的に外出するようになった」「最初は不安だったけど、学生さんと一緒に作品ができて良かった」「パン作りは孫と一緒に楽しもうと思います」等々、参加をきっかけに今後の生活が豊かになることが期待できるような素敵な感想をいただいております。

近年高齢化が進み、社会的に高齢者を支える仕組みづくりをどうしていくかが模索されているところです。今後は保健所主催で一般

介護予防事業を開催するだけでなく、地域の高齢者の集まりに向いて介護予防の啓発をしていく取り組みも行っていきます。平成28年度は内容をリニューアルし「若返りきらきらセミナー」として開催を検討しています。今後も大学と保健所の協同により、地域の皆さんの健康づくりに寄与していきたいと思っております。



ハイジの白パンづくり



オリジナルTシャツづくり



声を出してみよう



香りのよいヒノキを使って

平成27年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館 交流事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 長岡真美

瑞穂児童館と名古屋女子大学が協働して事業を行うようになって8年がたちました。27年度も11の講座とクリスマスイベントを開催し、たくさんの皆さまが参加してくださいました。児童館活動の大きな柱に「子育て支援活動」があります。子供たちが自由に遊ぶだけの場所、と思われがちな児童館ですが、平日の午前中などは乳幼児さんとその保護者のかたで賑わっています。児童館ではお子さんとお母さんが安全に遊べてほっとくつろげるような、居心地の良い施設作りを目指しており、子育て家庭の相談・援助活動もおこなっています。子育ての知識や情報が簡単に手に入る時代ですが、かえってお母さん方は自分の子育てに自信を持てなかつたり戸惑っているようにも思えます。そんな中で、保育学科や教育学科を擁する名古屋女子大学は大変心強い存在です。27年度も子育て期のお母さんの気持ちに寄り添った内容の講座を開催していただきました。女子学生の皆さまが子供たちの遊び相手になっているそばで、お母さんたちは日ごろの悩みや考えをお互いに話し合い、自身の子育てを見直す機会をもつことができました。また音楽や絵本を媒体にして親子で楽しく遊び、コミュニケーションの大切さを学ぶ講座もありました。お母さん方にとって、大学の先生による専門的な根拠に基づいた講座は大変貴重で心に落ちる体験になったことと思います。

子供が中心となって取り組む、ものづくりの講座もたくさん用意していただきました。

自然素材を使った美味しいパンや伝統菓子のおこしものづくり、自分で作ったおもちゃで遊ぶことで身近な科学を体験するもの、どの講座も学生の皆さまが子供一人一人についてくれたので、安全に楽しみながら最後まで仕上げることができました。本物の素材と道具を使った講座は、日ごろ児童館ではできない体験のため、毎年楽しみにしている子供もいます。

児童館の大きなイベントにクリスマスと児童館まつりがありますが、短期大学の皆さんや春光会の方々のご協力は欠かせないものとなっています。学生さんの手作りのイルミネーションの前では、記念写真を撮る親子さんの姿を毎年見ることができます。またクリスマスイベントに参加した方へのアンケートでは「お姉さんたちの一生懸命な姿に癒されました。」など、好意的な感想がたくさん寄せられていました。

次年度はどんな企画が上がるのだろうと、地域の皆さんと同様に児童館も楽しみにしています。そして、どうすればもっと皆さんに喜んでもらえるか、これからも名古屋女子大学と児童館の共催事業が、より地域に貢献できるものに発展していけるように、ともに考えていきたいと思っています。



子育てグループ教室



おこしものづくり



空気ロケット発射!!



クリスマスパーティー

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～絵本の読み語り～

幼児保育研究グループ

今年度は、研究主題を「豊かな言葉の獲得」の一環として、絵本の活用に焦点を当てて研究を進めていくことにしました。言語活動を豊かにすることで、豊かな人間関係を築く力を養っていくことを、大きな目的とすると共に、教師自身の絵本の活用の仕方を振り返り、実際に保育に生きる研究としていきたいと考えています。

研究の進め方として、今年度は、個人研究の形で進めていくことにしました。個々の担当が、毎日の保育の中で課題と感じていることや絵本という媒体から子供がどのように感じ受け止めているのか、またどのように影響し合っているか等、研究内容を絞り、取り組んでいきます。

第1回研究会では、研究テーマについての意見交換を行いました。

絵本についての考え方は、多種多様であるので、絵本ごとの事例を調査研究するとよいのではとの助言をいただきました。子供は、実体験と絵本の世界を行ったり来たりしながら自分なりの世界を広げていくこと

になります。子供によって個々に興味を持ち方が違うことを認めながら、絵本の持つ意味について考え直していきたいと考えています。また、幅広い分野を持つ絵本に教師自ら関心を深め、子供に読む絵本の世界を広げることにも着目しています。（文責：森岡とき子）



研究会議

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究？」

～学生が主体的に学修する力を身につけるための教育方法の開発～

遠山佳治代・歌川光一・佐々木基裕・渋谷寿・白井靖敏・杉原大樹・辻和良・羽澄直子・服部幹雄・原田妙子・野内友規・三宅元子・吉川直志

平成27年度～平成29年度の本機関研究では、中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の中の「主体的な学修を確立」させることを主眼に置いています。研究1年目の平成27年度は、教員には「主体的な学修」を促すための授業の工夫についての成果や意識等を確認するため、学生には「主体的な学び（学修を含む）」についての実態と意識を把握するため、平成27年12月～平成28年1月に「主体的な学修および学習に関する調査」「大学での学びに

関する調査」を実施しました。そして、平成28年度はその調査結果の分析を進めています。

また、平成27年度に特定非営利活動法人 NEWVERY の指導のもとで実施しました、学生（文学部児童教育学科児童教育学専攻）へのインタビュー調査の分析を進めながら、各学部・学科での授業の事例報告を比較検討して、主体的な学修を促進させる教育方法を検討しています。

（文責：遠山佳治）

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

歌川光一代・河合玲子・児玉珠美・佐々木基裕・遠山佳治・藤巻裕昌・三宅元子・吉川直志・吉田文

平成17年度から、本学の建学の精神に基づき、本学の伝統および時代の要請に即した研究テーマとして、創立者であられる越原春子先生の研究および女子教育に関する研究に着手しています。平成28年度から六期目に入りました。4月より新たな研究メンバーとして3名の先生をお迎えすることができ、総勢9名のメンバー構成となりました。越原春子先生の建学の精神、教育理念を踏まえて女子教育をとらえていく共同研究と、越原春子先生の功績を視野に入れた研究者個々の専門分野からの個人研究の二本立てで、学際的に研究会を進めていくことになります。

従来の本機関研究によって、本学園の「よき家庭人であり力強い職能人としての女性を育成する」という理念が多様な観点から確認され、その成果は『総合科学研究所』の論考として着実に蓄積されてきました。昨今、女子大学や短期大学の存在意義に対して多様な議論が展開されています。本期の研究においては、旧制高等女学校から高等教育へ、という戦前から戦後にかけての女子教育界の動向を見据えた女子教育研究を進め、女子大学生のキャリア意識について考察する際の視点を獲得していければと考えております。

(文責：歌川光一)

プロジェクト研究

「系統性と連続性をもった音楽教育のメソドロロジーの開発」

～ミュージック・リテラシー向上のために～

稲木真司代・歌川光一

「ミュージック・リテラシー」という言葉をご存じでしょうか。あまり聞いたことがないかもしれませんが、これは音楽の「読み書き」の能力のことを意味しています。日本では母国語の読み書き、いわゆる一般的なリテラシーは世界においても最高レベルの水準にあるのですが、音楽の読み書きのレベルは残念ながらそれほど高くはありません。小学校の6年間と中学校の3年間、日本の義務教育においては9年間も毎週音楽の授業があるにもかかわらず、それだけでは楽譜を見て歌ったり、思いついたメロディーを譜面に書いたりすることができるようにならないのです。それは、現在の音楽

教育が系統的なメソドロロジーに基づいて教えられていないからです。本研究は、音楽科においても算数や漢字の学習のように系統性と連続性を伴う「積み重ね」によって教えるためのメソドロロジーとそれに則したカリキュラムを構築するための基本的な理解や原則、また教授法について考察し、また現行の音楽教科書の課題などを明らかにし、世界でも稀な、千年以上の歴史のある音楽文化を豊かに受け継いでいる日本においては日本独特のアプローチが必要となることを理解することを目的としています。

(文責：稲木真司)

プロジェクト研究

「乳児接触における学生のマザリーズの学習効果に関する研究Ⅱ」

～音声ピッチに焦点をあてて～

児玉珠美代・神崎奈奈・大嶽さと子

本研究におきましては、昨年プロジェクト研究を継続し、乳児接触におけるマザリーズ表出の実態調査及び表出困難者に関する音声分析調査を通し、マザリーズ表出が苦手な学生を対象とした学習効果を明らかにすることを目的としております。

研究計画と致しましては、学生のマザリーズ表出の現状把握、乳児接触経験前後のマザリーズ表出調査、乳児及び人形対象のマザリーズ表出比較等を順次実施して参ります。マザリーズ表出の判定は、すべて録音された音声のピッチ幅(声の高低幅)を基準としていきます。今回は地域の0歳児親子の方々にご協力いただきまして、静かな環境での個別乳児への絵本読み聞かせ音声の録音が可能とな

りました。

この4月より、保育学科1年生全員の人形対象の語りかけ音声録音、そして学内のマザリーズ教室経験前後における0歳児対象の個別絵本読み聞かせ音声録音等、30名の学生を対象とした研究活動を進めております。現在のところ、昨年研究成果と課題を活かした活動展開ができていないのではないかと考えております。自然表出が当然であるとされていたマザリーズ表出が苦手な保育者養成校の学生のための学習プログラム提案をめざして、今後も研究活動を推進して参りたいと考えております。

(文責：児玉珠美)

プロジェクト研究

「子どもの主体性を尊重した保育実践の研究 2」

吉村智恵子代・荒川志津代・小泉敦子・安田華子・磯村紘美・宮本桃英

本研究では、「子どもの主体性を尊重した保育」に着目して保育実践現場から情報を収集し、学生へ伝える形としていくことを目的としています。

昨年度から引き続き、乳児保育を担当する初任保育者が記述した保育エピソードに表れた特徴の分析をすすめています。乳児保育を担当する初任保育者が記述する事象には類似したものがあり、それらを分析する過程で、乳児の行為のとらえ方に保育者の個性がみられています。特に、乳児の行為を肯定的にとらえる傾向の強さに保育者による相違があり、それを自己の保育行動とどのように関連させているのかも含め、保育行為全体の様相に着目して、保育対象で

ある乳児及び保育者自身の主体性についても検討しています。

今年度新たに取り組んでいるのが家庭での保育を対象とした調査です。養育者(主として母親)が乳児期の子育て過程で経験していることを、インタビューにより調査をしています。現在、乳児を持つ21名の養育者へのインタビューを終えています。家庭で乳児との間で生じた養育行動について語られた言葉から、養育者が子との関係性をどのようにとらえ、養育行動を決定しているかなど、それらの傾向にみられる主体性を明らかにしたいと考えています。

(文責：吉村智恵子)

平成28年度地域貢献事業計画

本研究所ではこのたよりの報告にもあるように、地域貢献事業として瑞穂児童館および瑞穂保健所との交流事業を企画・運営しています。大学での研究や活動を最大限に生かした講座を行うことで、これまで高い評価を頂いている事業となっています。今年度も、学内公募により地域貢献事業への参画をお願いしましたところ、多くの応募があり、これまでも増して充実した講座企画が採択されました。

瑞穂児童館との交流事業は、既に8月からスタートし、3月までに全12講座を開催します。保育、食育、音楽、造形、PC、科学

といった幅広い分野の特色ある研究を基にした楽しい企画となっています。瑞穂保健所との交流事業は、昨年度まで好評であった企画を引き継ぎ、今年度から保健所での一般介護予防事業への支援として65歳以上の高齢者一般を対象に「若返りキラキラセミナー」を11月から全5回で開催します。

本事業は、家政学部、文学部、短期大学部の教員および多くの学生の有志の協力によって有意義で内容豊かな地域貢献となっています。今年度も名古屋市瑞穂児童館と名古屋市瑞穂保健所の共催講座にご期待下さい。
(文責：吉川直志)

講演会のお知らせ

演題 今後の大学教員に求められる資質 ～新課程認定に向けて～

講師 無藤 隆 氏 (白梅学園大学教授)

日時 平成28年9月23日(金) 14:40～16:40

場所 学校法人越原学園 越原記念館ホール



略歴

無藤 隆 (むとう たかし) 東京大学教育学部卒業、聖心女子大学、お茶の水女子大学を経て、現在、白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。専門は、発達心理学、教育心理学、幼児教育、小学校教育など。社会的活動として、文部科学省中央教育審議会委員、内閣府子ども・子育て会議会長、保育教諭養成課程研究会会長などを務める。主な著書に、『幼児教育のデザイン』(東京大学出版会)、『認定こども園の時代』(共著、ひかりのくに)、『はじめての幼保連携型認定こども園教育・保育要領ガイドブック』(フレーベル館)。

平成30年度実施予定の教職課程の新課程認定では、カリキュラムはもちろん、教員の資格審査も大きく変わる可能性があります。各学部に教職課程を設置する本学も大きな変革を余儀なくされると考えられます。

この変革に対応するべく、今年度は、新課程認定に向けた「今後の大学教員に求められる資質」をテーマに、中央教育審議会の委員を務めていらっしゃる無藤隆氏にお話を伺います。同氏は、中教審の中でも中核を担っていらっしゃる方ですので、国の方向性を向う良い機会であり、本学教職員にとっても非常に参考になるお話が伺えるものと考えます。

今年度(H28年度)運営委員

委員長

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)河合 玲子
KAWAI Reiko
(短期大学部)小町谷 寿子
KOMACHIYA Toshiko
(家政学部)羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

教授

越原 一郎
KOSHIHARA Ichiro

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

編集後記

ここに総合科学研究所だより第23号をお届けいたします。本研究所での研究はどれもしっかりと方向性を持ち、未来志向を感じることができます。一步一步着実に進んでいる研究活動に今後ともご期待下さい。昨年度、大学では文学部の汐路学舎への移転があり、多くの教員は忙しい日々となりました。そのような中でも研究や研究所の事業への参加が精力的に行われました。そのような姿が、このたよりに伝われば幸いです。ご執筆頂きました関係者の皆様には感謝申し上げます。地域貢献事業では多くの先生方に参加頂き、さらに本年度の事業にもご協力頂けること感謝いたします。研究所の事業や研究は未来へと続く研究活動となっていきます。今後とも、総合科学研究所の活動にご期待頂き、ご協力をお願いいたします。
(文責：吉川直志)